

「マクベス」における魔女の役割について

小 島 信 之

マクベスのダンカン王弑逆は、同時に、皮肉にも彼自身の内部の「不朽の宝」なる良心への致命的一撃なのであった。——と、このように焦点を主人公の内部に集中する立場を徹底していくと、「マクベス」は、ドナルド・ストローファールの規定するように「個人的道徳劇」となってしまうであろう。彼によれば、「マクベス」とは、次のような「単純な中心観念」が「純粹な劇の形態で実現されている」ものである。即ち、「小宇宙なる個人の内部には道徳的秩序が存在していること、良心から逃れる道はないこと、人は犯罪者であると同時に彼自身の死刑執行人であること。」

果してシェイクスピアがこのような単純な道徳観念の劇化を図つたものであつたかどうかは大いに疑わしい。いや、どんな観念であるにせよ、何か抽象的な命題が先にあつて、それを劇の形で説明するといった中世の典型的な道徳劇は、ルネッサンスの純粹な詩人であるシェイクスピアの世界からは、もはや姿を消しているのである。ストローファールのいわゆる「単純な中心観念」とは、

その実は、とうていそのような観念では割り切れる筈もない複雑精緻な一全体の中から、彼が己れの好みに合うものだけを抽象してきた結果にすぎないであろう。それはそれでいい。だがその抽象物を逆に全体の上に蔽い被せようとする本末顛倒是許されないであろう。それは扮れもなく大宇宙的な振幅を有するこの作品を勝手に矮小化して小宇宙の限界内に閉ぢ込めてしまうことになるからだ。しかし、飽くまで個人の内部の良心と邪念との間の葛藤の劇に心を奪われているストローファールには、「マクベス」の眞の舞台がその視野の中に入つてこないものようである。彼はいう。

「主要な闘争の舞台はマクベスの精神の内部にある。……そこには主人公に対立するいかなる敵もない。マクベスが彼自身の敵なのである。そして命運尽きた戦いを世界に対してばかりでなく、彼自身に対して闘つていく。」

この、自己自らを敵とする自己破壊的行為は、カール・メニンジャーにでも伺いを立ててみなければ、とうてい解けそうもない

奇怪な謎である。しかし、ストーリーファーの場合、それはひたすら主人公の内部にばかり目を注ぐその立場から当然結果する遠近法の戯れにすぎない。ひとたび眼を主人公の外部に向ければ、そこに圧倒的にのしかかつているマクベスの真の敵がありありと眼に見えてくるであらう。

マクベスはなぜダンカンを一ひいては自分自身を殺したのであつたか。この最も深刻な問題が、小宇宙の限界内に跼せきして、果して解けるものであらうか。ストーリーファーが追究していつた結果は次のとおりであつた。

「なぜマクベスはダンカンを殺したのであつたか。シェイクスピアは、この場合に限つて、悪の起源を全く説明していない。「オセロ」や「リア」においては明白に説明してくれているのに。——即ち、「オセロ」においては、悪は徳の蔑視から生じたとし、「リア」においては、驕慢な怒りが心臓を焼き、そして冷かな利己心がそれを凍らしたのであつた。ところが、「マクベス」では、シェイクスピアは主人公の行為の動機を殆んど全く説明していない。マクベスとその夫人は、徳が何であるかを理解している。彼等は人並外れて傲慢なのでもなく、また、常軌を逸して利己的なものでもない。もしわれわれが彼等の話し振りと彼等の考え方とから判断するならば、いわゆる「野心」というものが何等の解答にもならないことに気が附くであらう。恐るべきは、そのような善への可能性を有する男女の内部における、突如としての、悪の止め度を知らぬ奔騰范濫にあるのだ。彼等の行為の理由を探索することは、本来無動機の夢中遊行にその動機を探索するよう

なものである。なぜならば、彼等にはもともと動機などは存在しなかつたのであるから。……悪の神秘は徳のそれよりも大きいものであるし、また、大きくなければならぬ。なぜならば、もし悪に、それを支持するに足る理由があるならば、それはもはや悪ではなくなるであらうからだ。マクベスもマクベス夫人も、彼等の目的を説明していないし、またその行為を正当化しようと努めてもない。——それは忌むべき目的についての単なる談議でさえもが、その目的を余りにも明瞭に暴露しすぎて、そのために行動が妨げられてしまふ、といったかのである。彼等はただ考えることを止める場合にだけ、そしてまたある種の二義的な徳、即ち断固不動の決意とか勇氣とかにその全注意を集中して、圧倒的な良心の支配を拒絶しているあいだけ行動することができるのだ。そしてこのような本性の畸形化は、必然に彼等の人格を分裂させ、複雑な二重性格へと陥入れてしまふのだ。」

マクベスの犯罪は、ストーリーファーのいわゆる「無動機の行為」にすぎなかつたのであらうか。夢中遊行のように無責任な突発的錯乱にすぎなかつたのであらうか。それはなるほど「恐ろしい」ことには違いない。しかし、それではストーリーファー自身の主張する「個人的道徳劇」はその最も重要な根拠を喪失してしまわなければならない。

マクベスは、それと承知しながら、「自己の不朽の宝を人類共通の敵に譲り渡し」てしまつたのであつた。扮れもなく敵はいらる。その敵はマクベスの内部にでなく、外部にいた。悪の起源は、その外部の「人類共通の敵」にあつた。その敵の味方に組し

た瞬間から、従来の関係が逆転して、人類そのものが彼の新しい敵となつたのであつた。これこそシェイクスピアが「マクベス」において迫真的に「説明」してくれているところのものである。シェイクスピアは「殆んど全く説明していない」どころではなく、これほど力強く、これほど徹底して悪の起源が説明されたことは、彼の悲劇中でも且てなかつたほどであつた。

舞台を主人公の精神の内部にだけ限定することは無意味である。そこには、善への可能性と同時に悪への可能性をも有する、われわれと全く同種の人間しか見当るまい。むしろ、シェイクスピアは、あのような大罪と残虐行為を敢行するにも拘らず、主人公をどこまでもわれわれと同じ人間、われわれが最後まで同情を寄せずにはいられない「人間」として描き出してくれたのであつた。それはキラ・クーチを始め多くの批評家が、讃嘆の余り、シェイクスピアの靈腕の程を分析して納得しようと努めたところであつた。したがつて、かかる主人公の内部に「悪の起源」が見当らないのは当然のことである。それを主人公の性格の欠陥にばかり見出そうと狂奔する一部の批評家の幣に陥入らなかつたストーファアの誠実は、それはそれとして買われなければなるまい。

眼をひとたび外部に向けると、小宇宙はたちまち渾沌たる大宇宙の渦巻のうちに埒し去られるであろう。そこには邪悪な「闇」の力が充満していて、この世のありとあらゆる「光」に向つて壮大な戦いを挑んでいるのがまざまざと見えるであろう。われわれは、アラ・ダイス・ニコルとともに、われわれが「単純な王殺し」の面前にではなく、ある宇宙的悲劇の面前にあることを感じない

ではいられない」であろう。このような「マクベス」全篇に漲る宇宙性は、この劇をシェイクスピア劇中最もギリシャ悲劇に近い位置におくものであつて、数多くの批評家が異口同音に主張しているところである。即ち、「マクベス」の舞台は主人公の精神の内部に局限するには余りにも広大すぎるのである。

しかし、ストーファアも、この余りにも明瞭な宇宙的規模を全然無視してしまふわけにはいかない。そこで、故意に——というよりは彼の立場から必然的に、宇宙性を小宇宙の遠い背景に移動させてしまふ。彼はいう。

「なるほど、より大きな機構——即ち、宇宙的秩序と政治的秩序とが、「リア」におけるように、ここにもなお存在はしている。だがシェイクスピアの確実な筆は、それらのものを、出しやばらない、控え目なタッチでスケッチしているにすぎない。」

事實は逆に、「より大きな機構」が、出しやばりすぎるほど前面にのさばり出ていて、ために主人公の方が、却つてその中に呑み込まれてしまつていゝのではなからうか。ここでは、「リア」の場合よりも更に緊密な関係が、主人公と外部との間に存在している。「リア」にあつては、見るも無惨に荒れ狂つていゝ人間達に、自然が格好の書割を提供しているとはいへ、その自然そのものまでが無秩序な渾沌状態に陥入つていゝのではない。ところが「マクベス」においては、自然そのものに深い龜裂が生じ、本来の秩序が逆転している。「マクベス」全体の雰囲気は異様に暗いのは、昼の後に慎しやかに繞ってくる夜の暗さなのではなく、本来真昼の筈の時刻に太陽を蔽い隠しているものがある

ために生ずる不自然な闇の故である。この「マクベス」の舞台一面に蔽い被つてゐる圧倒的な闇の力こそ、「マクベス」を他の悲劇から截然と区別する独特の雰囲気なのであつて、「それを弁別することは容易だが、敘述することはむづかしい」と嘆きながらも、ブラッドレイが繰返し繰返しひとに伝えようと努めたところのものであつた。それは、「不自然」というよりは、むしろ「超自然的」な、しかし、余りにも生まなましいが故に、日常卑近の現実よりはさらに現実的な、一種名状し難い、恐怖すべき雰囲気である。「いわば、われわれはこの劇によつて、日常生活の次元よりも更に高い次元に引き揚げられる。疑いもなく、このことこそ、シェイクスピアが、意識してにしろ、そうでないにしろ、「マクベス」において、超自然的な要素を、場面から場面を通じて強調する第一の目的であつた」と、ニコルも述べている。

この不気味な超自然的雰囲気は凝結したところに、例の魔女が姿を現はす。それは清廉潔白なバンクハオの眼にさえ、「この世に住むものとも思はれないが、しかも地上にいる」と、映る不思議な存在である。彼女等は、事実、当時実在していた女魔法使としては地上に住むものであるけれども、また、あの「闇」なる「悪魔」の手先としては超自然的存在なのであつた。若干の予言と魔法の能力は与えられているが、人間の運命を全面的に支配する運命の女神ではない。当時の通念よれば、まさしく墮天使なる悪魔の手先であり、また悪魔そのものとも見做されていたのであつた。

「マクベス」の幕は魔女によつて開かれ、その奇怪な合唱、

“Fair is foul, and foul is fair” (美しきは醜く、醜きは美し)によつて始まる。この一句は最後まで不気味な余韻を響かす。これこそこの劇の主調音なのであつて、表面はフェアがファウルへ、また、ファウルがフェアへと交替する渾沌状態を示しているとともに、裏面に、真・善・美等を、偽・醜・悪等に逆転させようとする悪魔の不逞な意志を潜めているのだ。この主調音の展開をみなければ、「マクベス」劇はその真髓を喪失し、主人公の悪の起源は空しい神秘の霧の彼方へ消え去つてしまふであらう。悪の神秘は、ここ、魔女の姿に凝結して、われわれの眼前に突きつけられているのだ。彼等はその背後の眼に見えぬ巨大な破壊的意志の最尖端としてこの地上に派遣されている。だが、人間には自由意志が与えられており、そう易々と彼等の傀儡になるものではない。マクベスは始めから彼等の支配下にある悪魔的存在なのではなかつた。だが、野心と恋愛(彼の妻への愛情は絶対的である)に酩酊し、しかも、嚇々たる武勲を立てて凱旋途上にある得意の絶頂のマクベスにたいして、「超自然のものの誘惑」は彼の全存在を震撼させるほどの魔力を揮う。もし魔女が出現しなかつたならば、マクベスは決してあんな大罪を執行しはしなかつたであらう。魔女の簡単な予言の言葉は、主人公にとつて致命的であつた。そのわけは、ただただ主人公の内部にその言葉を耳にした瞬間に明るみに飛び出してくるものがあつたからなことであつたには違ひない。しかし、そこには、また、魔女の媒介なしには、明るみに出た瞬間にたちまち決定的な悪の相貌をとる所以もない筈の、微妙な誘惑があつたことも疑えない。ブラッドレイはこの間の機微を説明して次

のようという。「……だが、魔女は、同時に、主人公の周囲の世に絶えず働き続けている、ある力の証人なのである。それは、主人公が彼等に屈服したその瞬間に、彼をもちや脱け出ようもなく「運命」の網の目の中に絡み込んでしまうのである。」

マクベスに突如として悪が奔騰泛滥し出したのは、まさしく彼女が魔女の予言を聞いた瞬間からであつた。だが、魔女に出会う以前から、既に彼の心はファウルの方へと傾いていたに相違ない。まだ魔女が彼に出現してもいないのに、彼が登場早々発する最初の一句、*"So foul and fair a day I have not seen"*（こんな

天候の激変する日は始めてだが、先程の魔女の合唱の木魂返しのようにわれわれを驚かす。それは表面どおりの天候のことだけを指しているとは受け取れない。既に冥々の裡に両者の間に親近な繋りができていることを裏書している言葉だ。また、この日の天候のように、彼の心がフェアとファウルの両極に激しく揺ぶられている状態を物語っているものだ。フェアの極にはダンカン王がいる。ファウルの極にはその王冠を戴いたマクベス自身と最愛の妻の王妃の姿がある。晴天のときは色褪せてみえる王冠が一天俄にかき曇ると、たちまた燦然たる光彩を放つて彼の魂を魅了する。再び晴れ渡ると、見る影もなく光彩を失い、こんどは反対に臣下としての最高の地位にあつて忠誠を尽す現在の名誉の方が輝き出す。

マクベスにいつ弑逆の念が発生したかを、ブラッドレイは綿密に点検した結果、やはり、魔女に出会つて、「将来の王」という予言を聞いた瞬間であるとの結論に到達した。それ以前は、「半

ば形成された罪深い思い」があつただけに相違ない。単なる予言が、間髪を容れず弑逆と結合してしまつた。その間の事情はまさに神秘的である。だが、すくなくともマクベスは、その瞬間に、魔女の予言の可能性を信じたのであつた。とりわけ、予言の一部が実現したあとでは、もうすつかり、その真実性をも信じてしまつたのであつた。これが誘惑への屈服なのであつた。悪魔に加担した瞬間にフェアをファウルにしよう、或は、ファウルをフェアにしようという不逞の意志が現実が発生したのであつた。しかし、フェアへの傾きもまた劇烈であつたことは、彼のその後の目に余る惑乱ぶりが実証するところである。

このように、その破壊的な邪惡な意志の実現を図つて、粗し易い人間をその網の目の中に絡み込もうものと、絶えず虎視眈々としてわれわれの隙を睨つている、超自然的な悪霊の群が、現実、に、われわれの周囲に薙き寄せている。彼等の投げかける罠はまことに巧妙であり、われわれはいつ何時、彼等に誰かされて、その逃れようもない虜となつてしまふかも知れない。この恐しい、眼に見えない力の群を、まさに眼に見える、純粹な劇の形態において、シェイクスピアは鮮かに実現してくれたのであつた。

そのような悪霊の群をシェイクスピアはその肉眼で見たのだ。お蔭でわれわれも舞台の上に、われわれの肉眼で見ることを許される。この悪霊の力の圧倒的な偏在から眼を逸らして、主人公の内部だけを眺めてみたところで何が得られよう。マクベスの敵は彼自身なのではない。この魔女の代表する悪魔——彼自身いつているとおり、人間よりも遙かに智慮の多いこの悪魔こそ彼本来の

真実の敵であつたのだ。

ジョン・メイスフィールドもまたシェイクスピアの見たものを見た。

「マクベス」において、シェイクスピアは、(人生の外側にあつて、直接人間に働きかけることはできないが)人生のリズムを破ろうと欲し、それを唆かしにより、誤解される不明瞭な叫び声や、思い違いされる予言によつて破ろうものと努めている「力」の群を見た。彼は見た。これらの力が、悪魔的意志の分身であることを。それに対しては、人間の魂のうちの正しいものは常に障壁なのである。……マクベスの心中にある善なるすべてのものを貫通して、この悪魔的な意志が、マクベスの耳に聞えるようにとの努力のうちに、その力に従属しているもののあいだに嵐が捲き起される。あらゆる自然が警告を発して鳴り響くが、それは誘惑されているものにも脅かされているものにも触れ得ない。なぜなら、そのように「運命」づけられているからである。なぜなら、その瞬間には悪魔的な意志が余りにも強すぎるからである。……悪魔的な意志が凱歌を奏した瞬間に、鐘が鳴り、ダンカンが殺される。」

マクベスがよいよダンカンを殺してしまうその瞬間まで、あの「軍の女神を妻とする」勇猛無双の名将が、どんな戦慄すべき恐怖に襲はれ、孤疑逡巡し、一度ならず引き返そうとし、フェイアとファウルの両極に激しく揺ぶられたことであつたか。しかし、魔女の予言を信じた瞬間に、ファウル・プレイは、ついに決行されなければならないように運命づけられたのであつた。その

瞬間の彼は、隣にいるバンクウオが、「ねえ君、君はなぜびつくりするんだ。そして恐がつている様をするんだ。こんなに素晴らしいことにさ」と、呆れて問い糺さずにいられないほどの惑乱に陥つていた。やがて予言の一部が実現されると、もはや昂奮その極に達したマクベスは、現実のありのままの事物さえ眼に入らないほど逆上してしまう。このような状態でいってどうして「超自然のものの誘惑」を敢然と一蹴し去ることができよう。

This supernatural soliciting

Cannot be ill, cannot be good : if ill,

Why hath it given me earnest of success,

Commencing in a truth? I am thane of Cawdor:

If good, why do I yield to that suggestion

Whose horrid image doth unfix my hair

And make my seated heart knock at my ribs,

Against the use of nature? Present fears

Are less than horrible imaginings:

my thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man that function

Is smother'd in surmise, and nothing is

But what is not. (I. iii. 130-142.)

(この超自然のものの誘惑は、どうも兇ではないようだし、吉でもないようだ。もし兇なら、なぜ先づ真実を告げて、前途の成功を予約してくれたか。わしはコーダーの領主なのだ。もし吉なら、なぜわしは一種の誘惑に心を奪われ、その

恐ろしい姿を眺めて、髪は逆立ち、居据つてゐる心臓が、自然の習慣に反して肋骨とぶつつかるとか。眼前の危険は、むしろ想像の恐怖に劣る。心中単に弑逆を空想しただけで、わしの統一した心の王国は麻のように乱れて、頭の働きは妄想に圧倒され、眼に見えるものは、ただ幻影ばかりだ。」

この時の彼の心は、掻き乱された泉のように立ち騒いでゐる。そして、彼自身その底を見透すことができない。彼自身の世間的判断に従うと、この超自然のものの誘惑がどうして兇であり得よう。なぜならそれは既に事実に基づいてゐる成功を彼に約束してゐるではないか。良心の標準からすると、殺人の恐ろしい姿を眺めて、彼の髪が逆立ち、心臓が浪打つのが、どうして吉であるう筈があろう。彼は、「眼に見えるものは、ただ幻影ばかり」という錯乱の中にまつたく平静な態度を喪失してゐる。まさに、*Fair is foul, and foul is fair* そのものの状態である。

魔女——即ち「殺戮の天使達」は追跡を止めず、マクベス「最上の愛人」なる妻を通じて執拗に働き掛ける。

ここでも、もしマクベス夫人がいなかつたなら——という仮定が成立つのは、その瞬間のマクベス夫人が、殆んどまつたく魔女の化身となつてゐるからのことである。彼女もまた魔女の予言を、彼等に直接会ひもしないのに、しかも夫よりも遙かに徹底して、なんらの懷疑もなく信じ切つてしまつたのだつた。あの凄まじい「舌端の力」に触れるものは、彼女がどれほどまでの超人的な意志の力で以て彼女の天性をねぢ曲げ、フェイアをファウルに、また、ファウルをフェイアに変えようとしてゐるかに思い及

んで、膚に粟を生じないではないであらう。その彼女の自然への反逆の程度がどれほど極端なものであつたかは、その後の彼女の急速な、人格解体の事実が生まなましく証明してくれるところである。しかも、その自己非人間化のさなかにおいてさえも、ダuncanが彼女の父親に似ていたために、自らの手に兇刃を握ることがどうしてもできなかったのであつた。醜い歪曲の隙間から美しい自然が覗き出ている。したがつて彼女は、もちろん完全な魔女になり切ることはできなかったのだが、すくなくとも、その瞬間の彼女は、フェイアがファウルであり、ファウルがフェイアである魔女の信条と破壊的意志の積極的な推進者である。そして、まだフェイアとファウルの方へと傾けてしまつたのであつた。しかもを決定的にファウルの方へと傾けてしまつたのであつた。しかも彼女はそれが最愛の夫のためとばかり思い込んで痛ましくも懸命になつて自己の最上のものを蹂躪し去つていたのだつた。

マクベスが、不決断の擾乱のうちに大浪のように揺ぶられてゐる心から、罪の決行を躊躇して、

I dare do all that may become a man;

Who dares do more is none.

(I. vii. 46-47)

(男としてやつていい事なら何んでもやるよ。それ以上をやるうというのは男でもない)

と、せつかくフェイアの方へ傾きかけると、マクベス夫人がすぐ後を追いかけて、彼をファウルの方へ引き戻してしまふ。

What beast was't, then,

That made you break this enterprise to me ?

When you durst do it, then you were a man ;

And, to be more than what you were, you would

Be so much more the man.

(I. vii. 48-51)

(ぢや、どういふ獣だつたんです、この計画を私に打ち明けたときのあなたは。それを決行しようとなすつた時、あなたは男でした。そして、あなたが実際のあなた以上のものになつてこそ、それだけいつそう男らしくなる筈です。)

血腥い企みの介添をする悪霊どもに呼びかけて、彼女をすぐ男に変え、頭天辺から足のつま先まで最も恐ろしい残虐で充たし、血をどんよりと濃いくして、憐憫の近寄る道筋をすつかり塞いでくれるようにと祈り、自己本来の天性を極限にまでねぢ曲げてしまつたマクベス夫人にとつては、夫マクベスが殺人という不自然な行為を不敵にも逐行したときだけが男の名に値するものであつた。彼女は酒に麻酔薬を盛つて侍臣達を眠らせたのと同じように、マクベスに「希望」の麻酔薬を注ぎ込む。——彼女のいわゆる「この夜の大事業」は、彼等に「王権の威勢と支配」を与えるであらう。彼の勇氣と邪念を掻き立てようとする冷笑のうち、彼女は彼の本性を残酷な決心の方へと導いていく。記憶も理性も眠らせなければならぬ。侍臣達に飲ませた酒を彼女もあふる。罪は僅かばかりの水で洗い浄められるだらう。また、ひとの手に血をなすりつけることによつて罪は簡単に他へ移つていくだらう。かくして彼等の決心は固まる。

殺人は、マクベス自身がいつているように、暗い、死んだ、物の化の出没する時刻に起る。

Now o'er the one half-world

Nature seems dead, and wicked dreams abuse

The curtain'd sleep; witchcraft celebrates

Pale Hecate's offerings; and wither'd murder,

Alarum'd by his sentinel, the wolf,

Whose howl's his watch, thus with his stealing pace,

With Tarquin's ravishing strides, toward his design

Moves like a ghost.

(II. i. 49-56)

(今や地球の半分にかけて、自然は死んでしまつたやうで、奸悪な夢が帷の中の眠を掻き乱している。魔女達は青白いヘカトに供物を捧げて礼拝し、顔色憔悴した殺人鬼は、唸り声を合図とする狼の見張りに呼び立てられて、こんな風に抜き足さし足して、犯しにいくタークザインの足どりで、その目的の方へ、幽霊のように動いていく。)

弑逆を発見したマクダフの叫び声は決して誇張ではない。

Confusion now hath made his masterpiece!

Most sacrilegious murder hath broke ope

The Lord's anointed temple, and stole thence

The life o' the building!

(II. iii. 71-74)

(破壊がこの上もないことをしでかした。神聖を穢す大逆犯が、主の殿堂を切り開いて、その建物の本尊を盗み出したのだ。)

それは決して「単純な王殺し」ではなかつた。この場合王の身体がエホバの殿堂に譬えられているのも偶然ではない。

この恐しい夜の破壊は地球そのものにまで及んだのであつた。レノックスがその夜の状況を次のように語る。

「昨夜はひどかつた。われわれの宿では煙突が吹き倒された。噂によると、空中に号泣の声が聞え、息の絶えるような奇怪な叫び声が、恐ろしい大騒動や変事が今この不幸な時代に発生するぞ、と予言するのが物凄く響き渡り、暗闇の鳥は長いひと夜を啼き騒ぎ、ある人の話では、大地がおこりにかかつたように震えたという。(二幕、三場。)

この同じ日の外界に起つた不自然な出来事を、ロスと老人が話し合う。マクベス夫人の医者が後でいうように、「不自然な行為は不自然な混乱を生む」ものだ。

「天も人間の仕草を心痛したように、その血腥い舞台を威嚇している。時計を見ると昼間だが、しかも暗黒の夜が太陽を押し隠し、夜の勢力が盛んな為か、それとも昼が恥じ入っている為か、生々潑刺の光が大地の面を接吻すべき時に、暗黒がそれを葬り去っている。——今度の大逆事件と同じように不自然なことだ。この前の火曜日には、揚々として下界をへい睨する天上の鷹を、鼠を餌食にする梟が、飛び掛つて殺した。——そして、ダンカンの馬が、まったく不思議なことだが正真正銘の事実、その美しい駿足

の、みごとな逸物が、生れ変つたように兇暴になつて、馬小屋を破壊して暴れ出し、服従に抗して争うさまは、まるで人類と戦いをしようとするようであつた。——噂によるとお互に食い合つたそうだ。——それを現に見たこの眼が信じられなかつた。……

(二幕、四場。)

シェイクスピアの劇の世界でも、自然の秩序の破壊がこれほどまで極端にいつたことは且てなかつた。自然の水準以下に没落しているのは人間ばかりでない。この分裂した渾沌の世界では動物でさえもが不自然である。王であり親戚でもある有徳のダンカンがマクベスが弑逆したという自然の秩序の破壊はこのようなものであつた。これをストーリーファーは、主人公自身の内部の分裂闘争を強調するために外界に並行的に与えられている比喩または象徴にすぎないと解釈している。それは主人公の「道徳劇」だけを眺める立場からは当然の歪曲であるが、しかし、それは比喩でも象徴でもなく、マクベスが自己自身の内部の秩序の中心に反逆したことが、外部では同時に、ダンカン弑逆の行為となつて現われており、そのことがまた同時に、自然の秩序を破壊していることと一致しているのである。さもないければ、マクベスが「世界に対してばかりでなく、彼自身に対して闘つていく」というストーリーファアの言葉そのものも意味を失つてしまふであらう。シェイクスピアの劇のうちでも、「マクベス」ほど内部と外部とが相即不離の関係にあるものは他に類例がない。主人公の内部の分裂は、国家や自然の分裂と完全に同一の事件なのである。

このことは、理想的な国王というものに対する、シェイクスピア

アをも含めてのエリザベス朝人の考え方をみると明瞭であろう。即ち、エリザベス朝人にとつては、国王とは、自分勝手なことでできる専制者とは全く反対に、彼の上にある自然の法則の忠実な従僕であるとともに、天上の秩序と同様に堅固に構築された地上の正義の代表者なのであつた。したがつてこのような国王を弑逆するということは、地上の秩序はもちろん、同時に、天上の秩序に対する反逆にほかならなかつた。このようにみると、マクベスその人が単なる一国の反逆者であるというよりは、凡そ天地を貫く秩序、——端的にいえば、神の秩序そのものに対する反逆者という、超人的な悪魔の姿に姿貌してくるであろう。ブラッドレイも、「時に主人公が超人の像にまで巨大なものとみえてくる」とを指摘している。

しかし、マクベスは悪魔そのものではない。どこまでも人間であり、彼自身の内部も二つに分裂して闘争し合つているのである。彼自身にも自然の秩序は例外なく貫通している。二つに引き裂かれた国家や自然の苦悩は、また同時に、マクベス自身の凄惨な自虐の苦悩にほかならなかつた。それは殺しても殺しても殺し切れぬ良心から逆に殺されていき、ついに美しい人間が醜い野獣と化していく精神的自殺の過程として、小宇宙の内部の興味ある闘争絵巻を展開してくれるであろう。だが、その背後にせせら笑つてゐるあの魔女の合唱を耳にすると、人間、国家、自然、宇宙を貫通する神の秩序の破壊を睨つてゐる悪魔の手先に見事手玉にとられた、本来善良で有徳な人間の悲劇をみて慄然としないわけにはいかない。

ストーリーファーにとつては、魔女はただバンダラスのクレシダに對する役目しか勤めていない。即ち、既に存在しているものを明らかにさまに口に出して、相手の思ひを掻き立ててやるだけであるという。それならば、あの弑逆の決意がもととマクベスの胸中に既に存在していたことになる。しかし、そのような人物は、もはや、「マクベス」の主人公とは別人にすぎまい。

「魔女は劇としては素晴らしいが、哲学的には惑わしい。」とストーリーファーは首をひねる。「天地の間にはわれわれ人間の哲学では、とうてい夢想だもできないものがある」というハムレットの有名な科白がものをいう機会であろう。シェイクスピアもエリザベス朝人もひとしくその存在を信じて疑わなかつた魔女——ひいては、悪魔という超自然的な神秘は、ストーリーファーをも含めた現代人にとつて、もはや平土間客のための単なる見世物——「劇的効果のためにその意味や首尾一貫性を犠牲に供された」超時代的な見世物にすぎなくなつてゐるのではあるまいか。そして、それはまた、われわれが余りにも哲學的に考えすぎるからのものである。それにしても、どうして魔女をそのまま率直に肯定することができよう。しかし、ブラッドレイのいうように、現代の魔女は、姿を変えて、ボンド・ストリートの一室に陣取つてゐるかも知れないのだ。ハーディン・クレイグのような現代の錚々たるシェイクスピア学者でさえ、次のように警告してくれてゐるではないか。即ち、

「シェイクスピアと彼の時代とは、その様々な欠陥にも拘らず、われわれがこんにち自縛自縛に陥入つてゐる桎梏からの、あ

る種の自由をわれわれに与えてくれる。その自由とは、何よりも先づ、もつと普遍的な見解と、もつと包容的な、そしてもつと広濶な心を身につけることと、特に学者の側において、過度の専門化を斥けることにあると思う。学者達は折々普通の人びとよりは遙かに遠くシェイクスピアから閉め出されている。普通人に対してはシェイクスピアはいつも直接語り続けている。彼等はシェイクスピアの語っていることを理解するのに、学者よりもずっと多くの困難を感じる。だが彼等は彼等の理解するものを、彼等の心に直接受け取る。シェイクスピアについての一般人の誤謬は夥しく、また殆んど根絶し得ないものである。しかも、全く真実のところ、シェイクスピアはその民衆の心の中に生き続けているのである」と。

参考文献。

- Donald Stauffer, *Shakespeare's World of Images*. (The Development of His moral Ideas.) (New York, 1949)
- Allardyce Nicoll, *Studies in Shakespeare*. (London, 1927)
- John Masefield, *Shakespeare and Spiritual Life*. (New York, 1924)
- A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*. (London, 1926)
- Theodore Spencer, *Shakespeare and The Nature of Man*. (New York, 1949)

Hardin Craig, *Trend of Shakespeare Scholarship*
(*Shakespeare Survey*, 2: London, 1949)